

(5)国際緊急援助隊医療チーム

①ミャンマー：ミャンマー連邦サイクロン被害に対する国際緊急援助隊医療チームの派遣活動

派遣期間：2008（平成 20）年 5 月 29 日～6 月 11 日

活動サマリー

園田美和

1. 被害状況

5 月 2 日にミャンマー南部を襲った大型サイクロン「ナルギス」は、推定被災者数 200 万人以上、推定死亡者 8 万人の未曾有の被害をもたらした。日本は負傷者及び被災民に対し緊急援助物資支援を三度に渡り行った。また、ミャンマー政府からの要請に基づいて、国際緊急援助隊医療チーム（JDR 医療チーム）の調査団が 25 日より派遣された。現地状況の視察と関係機関との協議の結果、JDR 医療チームの派遣が決定された。

2. JDR 医療チームの活動

JDR 医療チームは医師 3 名（内科・外科・小児科）、看護師 6 名、助産師 1 名、薬剤師 1 名、臨床検査技師 2 名、放射線技師 1 名、栄養師 1 名、救命救急師 1 名を含む計 23 名で構成されていた。活動地域は首都ヤンゴンから車で 10 時間以上離れた、被害が最も大きかった地域の一つである、エヤワディ管区南部の町ラブッタの避難民キャンプ（居住者数約 6,400 人）である。5 月 31 日から診療を開始し、9 日間で延べ 1202 名の患者の診療を行った。患者の男女比には差を認めず、10 歳以下の子供の割合が最も多かった。

発災から 1 ヶ月近くが過ぎてからの診療であり、急性期の外傷患者は少なく、未治療の骨折や創感染が併発した患者が目立った。また、内科系疾患では急性上気道炎や下痢・嘔吐を訴える患者が多く、脱水症状を呈する者も少なくなかった。更に、皮膚疾患や被災後の精神的・心因的な体調不良を訴える患者も目立った。

現地は元々感染症流行地域であり、サイクロン災害後の感染症アウトブレイクも懸念されていた。JDR 医療チームが診療した主な感染症には、マラリア、インフルエンザ、結核、ロタウイルスによる下痢症があり、デング熱、麻疹が疑われる患者も存在した。

診療の初盤はキャンプの患者の割合が多く、中盤からはラブッタ市内やキャンプから遠く離れた村からの患者の割合が増加した。また、災害とは直接関係のない慢性疾患患者の割合も増加を見せた。

3. 住民の反応

JDR 医療チームは X 線撮影機や超音波等の医療機器と、各種感染症検査に対応できる検査機材、破傷風トキソイドや薬剤を持参しており、被災キャンプでも限られた資材を駆

使し、高度な診療を提供することができた。これらの設備を求めて、同じキャンプの中で活動していた政府系のクリニックから紹介される患者や、数時間かけて遠方から診察に来る患者も多く存在した。また、JDR 医療チームで対応できない患者に関しては、同行していた保健省の医師等と協力し、地元の医療機関へ車で搬送した。

我々医療チームが現地の住民に受け入れられた背景には、高度な医療設備のみならず、通訳を介した医療スタッフとの暖かい交流も一つの原因であると考え。例えば、災害後の心因的な体調不良を訴える患者に対し、時間の許す限り訴えを十分に傾聴している医師、薬の服用方法や副作用について丁寧に説明する薬剤師、40 度近い炎天下の中で診察を待っている子供にスポーツドリンクを提供した看護師等の行為は日本では当たり前の事であるが、現地では驚きを持って迎えられた。ある若い母親はサイクロンで夫を亡くし、私達の活動期間中に幼い子供をも亡くしたのだが、「日本チームに診療してもらってよかった」と、涙ながらに感謝の気持ちを述べていた。

4. 衛生活動

診療における看護活動の傍ら、キャンプ住民に対して衛生調査を実施した（n = 28）。その結果、下痢を呈する患者が多く、一部は脱水症状を併発し、特に小児では重篤な状況に陥っている者も少なくなかった。また、臨床検査技師等と協力しキャンプ側の意向を汲む形で、キャンプ内の水道の水質調査を行った。これは、大腸菌の検出が可能な細菌試験紙を用いた、飲料水の水質調査である。

飲料水として提供されている水道からは、大腸菌は検出されず、安全性が確認された。しかし、キャンプ内の池からは大腸菌が検出され、それを水浴びや飲料水に使用している住民も存在した。それらに対し、煮沸や消毒剤の使用等が推奨されていた。また食事の前に必ず手洗いをすると回答している者は 90% 以上であり、その半数以上は石鹸を使用していた。結果として、調査項目と下痢症の発症には有意な関連は見られなかった。

災害後の集団避難生活では、呼吸器感染症や下痢症が集団的に発生する恐れがあり、公衆衛生的な介入も必要である。今回の JDR 医療チームでは、災害急性期を過ぎた時期での医療活動の一環として、このような保健衛生活動を実施した。

5. 所感

今後、復興支援から開発支援への継続的な関わりを通して、現地医療施設や保健システムの機能回復と、災害時対応の構築が必要であると考え。被災者の方々の心身の回復を心から祈ると共に、ミャンマー国の更なる発展を心より期待する。



JMTDR 診療テント内部



避難民キャンプの子供たち

②中国：中国西部大地震被害に対する国際緊急援助隊医療チーム

活動サマリー

藤本幸宏（放射線診療部）

2008（平成 20）年 5 月 12 日、中国四川省汶川地区を震源とする M 7.8 の直下型大地震が発生した。中国政府の要請を受け国際緊急援助隊が現地に派遣されることとなった。救助チームは被害の甚大な地域での救援救助活動を行い、医療チームは四川省の災害拠点病院である四川大学華西病院で診療支援活動をおこなった。その医療チームの一員として放射線診療部藤本幸宏が 5 月 20 日から 2 週間派遣された。

被災地での医療活動については、被災住民の殆どが被災地域から退去しており、医療のニーズが不明瞭であるとともに強い余震が懸念されることから断念し、被災地およびその周辺から多くの被災患者が運び込まれる四川大学華西病院を活動拠点とした。華西病院では救急患者受け入れは全てシステム化されており、中国各地から派遣された医療チームとともに多発外傷・骨折、呼吸器疾患、急性腹症などの初期治療活動の医療支援を行った。また被災直後から不眠不休で活動し続けている ICU、産科病棟、透析、薬剤、放射線科など各専門分野領域への病院内支援活動も行い、医療チームの専門知識を生かした医療支援活動が行われた。



X線撮影支援活動を行う藤本幸宏放射線技師



華西病院と本部テント